

『虚無への供物』から「失われた書物」へ

中井英夫の『虚無への供物』は、日本ミステリー界の三大奇書の一冊とも、アンチ・ミステリーとも言われますが、筆者にとつては、世界のミステリーの最高峰の一冊です。エドガー・アラン・ポーから、ローラン・ビネの『言語の七番目の機能』に至るまで、筆者はミステリーの愛好者にすぎないのですが、それでもこの小説の、ホームズ兼ワトソン役の奈々村久生ななむらひさおの言う「本当の意味での真犯人」の姿には、アガサ・クリステイも脱帽せざるを得ないのではないでしょうか？ 小説の舞台は、敗戦後十年ほどの昭和二十九年（一九五四）、主要な登場人物の多くは、久生、その幼馴染のアリョーシャこと亜利夫など、若き高等遊民の風情で、彼らが入り出すバアやカフェなどの風俗および周辺世界は、著者が親交を結んでいた三島由紀夫や澁澤龍彦、また、

短歌雑誌の編集者として、その才能を見出し育てた、塚本邦雄、寺山修司、春日井建とも通底しています。七十年近く前の日本が舞台とはいえ、その社会的背景は、二〇二一年の日本と多くの点で共通しています。

筆者がこの書物を知ったのは、学生時代、宮川淳先生の演習での、ポール・ヴァレリーの「ドガ・ダンス・デッサン」の購読がきっかけでした。原文の難解さに大学の図書館に駆け込み、訳本を探しつつ、ヴァレリーの詩集も眺めるうち、「一と日われ海を旅して／（いづこの空の下なりけん、今は覚えず）／美酒を少し海に流しぬ／『虚無』にする供物の為に」で始まる「失われた美酒」(Le vin perdu) が心に残り、同じ図書館に何日か通ううちに、この一節を冒頭に掲げた小説に辿りつきました。

中井英夫が執筆時に住み、小説の主要な舞台になる氷室家のある、目白の下落合あたりに土地勘のあった筆者は、一時は、この辺りや、小説に登場する東京の町を歩きまわるほど、小説世界に入り込みました。武満徹装幀の、美しい函入りの書物をアルバイト代をはたいて購入もしました。(図1)ところが、友人に貸したり、引越越しを繰り返すうち、この書物は忽然と消えて（なくなりましたですが）、文字通り、「虚無への供物」と化してしまったのです。

先日、区立図書館で、戯れに色々な書名を検索するうちに、区内の別の図書館に、塔晶夫(Tō.

Qui...)の筆名で出版された、昭和三十九年（一九六四）二月二十九日発行の初版本があることがわかりました。マスクをしたままアクリル板越しに、カウンターで題名を告げ、取り寄せを頼むと、司書の青年に、二度ほど聞き返されたのち、「『去年の九月』ですね？」と念をおされしました。もう、それほど遠い、失われた書物 (Le livre perdu) になってしまったのでしょうか？

(2021/04/30)